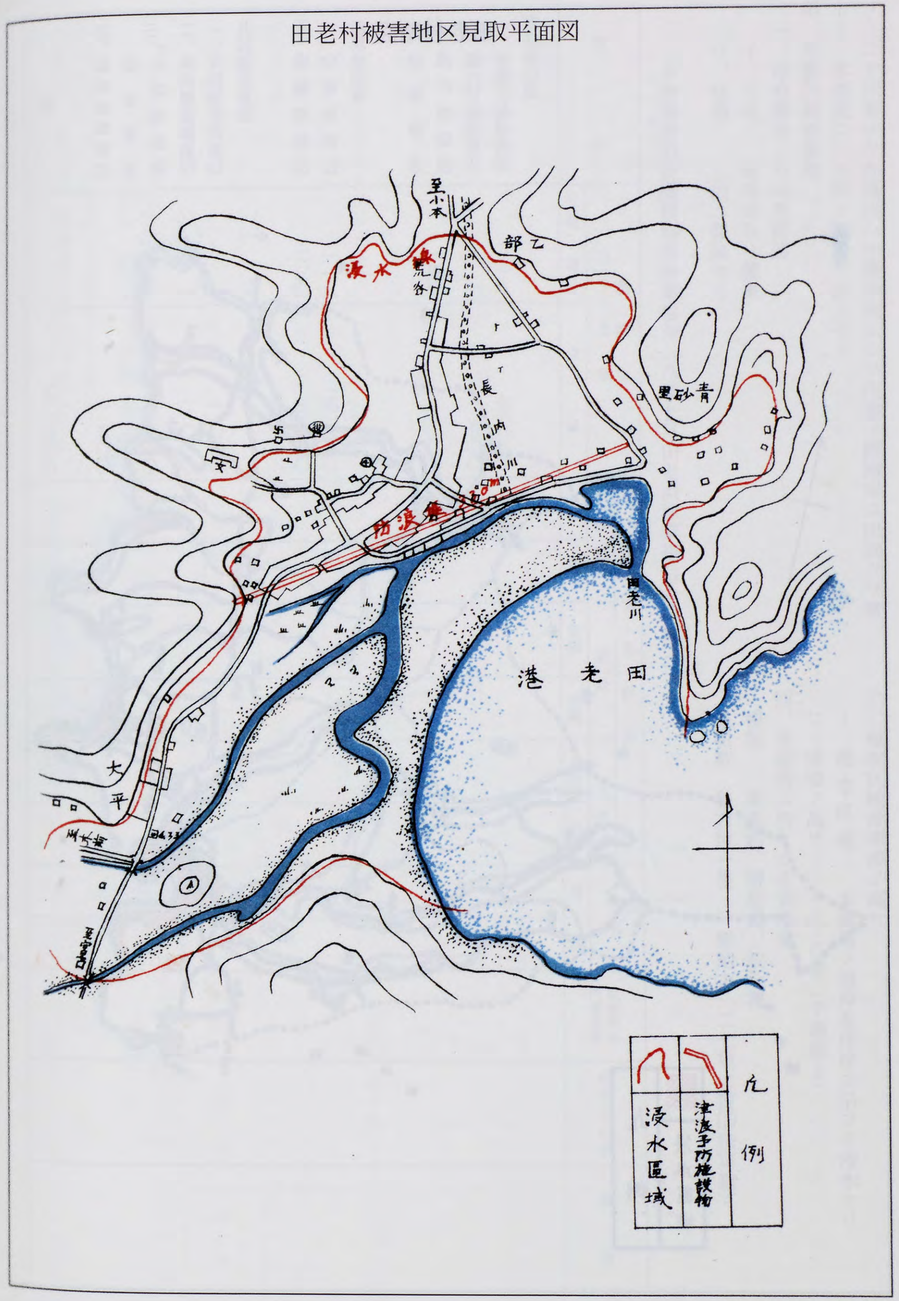
田老村被害地区見取平面図



4 「田老村津浪誌」田老尋常高等小学校編

第二編

第一章　地震と津浪

長い冬の夜も次第に更けて、人々は臥床に安らかな夢を追ふてゐた。夜明けまでにはまだ二刻程間のある三月三日の午前二時半頃突然風の吹いて来るやうな地鳴りがして、大地が揺れ出した。

「地震だな」と思ふ間もなくガタ〳〵ヅシ〳〵上へ下へ大きく揺れる。今にも天井が落ちるかと思はれるやうにミチ〳〵薄気味の悪い音、硝子戸の嫌な音や、重味の乗掛った様な音をたてゝ揺れる家屋、棚の物はカチ合ひながら盛んに落ちる時計はピタリと止まって動かない。敏感な子供達は戸外へ飛出し、幼児は固く父母へすがっておののいてゐる。十年来に無い強い揺れ方だ、この恐怖の中にも炬炉の止火に細心の注意を怠らなかった大の男達さへ、家の中に居たまらずに一旦は戸外へ難を避けた。電灯は消えて内も外も暗闇だ、其の時、遠く沖の彼方で大砲を打ったやうな音が二つ続様にした。だが人々は道路改修工事の夜業のハッパ位いに考へて余りに気にとめなかった。電灯がともってホット息を入れ安堵の胸撫で下した時、再び揺れた地震に電灯は消えて元の闇となったが、其の中に少し揺もおさまった。ものゝ十分位もたった頃から人々は何かしら胸に不安を感じ出した。老人達は**「こんな時に津浪が来るかも知れない」**と言へば、考へる余裕の出来た者は、若しやと思ひ、波の音、川の流れの音に耳をそばだて井戸水の様子をうかゞったり灯をつけて浜辺へ行って水の引く様子を見たりした。戸外へ出て潮鳴りを遠く聞き**「津浪が来るぞ」**と家へかけ込んで稚児を背負ひ、幼児の手をひいて直ぐ前の山へと走った者もあった。

時のたつにつれて人々の多くは恐怖の念も薄らぎ、厳しい寒さに炬炉の火をほじくり出して暖を取り寝もやらず雑談してゐた。しかし平常と何の変りもないのに安心して「暁方までもう一寝入り」と寝床へ就いた。

其の頃、沖から何か異変を告げる汽船の警笛が闇をついてポー〳〵と鳴った。警笛の音を聞いた者は、すぐさっきの大きな地震と結んで**「津浪襲来」**が頭に閃き、床へ就いた家内の者を起し身じまりもそこ〳〵に赤沼山へ**「津浪だ〳〵」**と半狂乱の様に叫け び乍ら走る、この叫び声を聞いた人達は狼狽し急にざはめき出し家の者を互ひに誘って闇の中をまっすぐに高地めざして走り続けた。

「津浪」此の詞は貧富貴賤老若男女の差別なく、現実から生への修羅場と化さしめた。唯生へ、唯々生へ、柵へあたり、塀へあたり、あるひは小石に足をとられて転ぶ等立ち上る間もなく後から〳〵と人の波に押されて転び重なり。人の山、かよわい女や子供達は誰彼となくしがみつく、もう腰がたゝず気ばかりはあせっても声が出ないで其のまゝ其処に倒れた者もあった、だが此の騒ぎを火事と聞き違へて屋根へ登って様子を見たが其れらしくもなく安心して就寝した者もあった。

其の間に狂ふ海魔は、速ての如くに陸をめがけて来た。湾口の岩にうちあたって、ゴゴゴゴーと岩をかむ音が人間の全神経をうばひ去った。闇にかすかに見へる海魔の容姿は丁度巾の広い長い帯を横に引いた様に。向風を伴ひ、先づ小林、大平に其の触手を延ばし其れから町、乙部へ……。バリ〳〵〳〵浪のあふりに家の屋根が沖天に舞ひ飛ぶ続いて家が順に将棋の駒でも倒すかの如く倒れる。

巨浪に対して団楽の園は完全に壊れた、第一の帰り波と矢継早に襲ひ来た、第二の大きな波とが口湾で激突し龍巻の様だったと逃げ後れた者で後方の怒号に妄失し何時波を被ったかもわからない、意識をとりもどした時は、波の下で胸や頭を柱や梁に押付けられ波のなす儘に任せるより術はなかった、可愛い愛児を背負ったが、何処で手放したか、両腕に固くかゝへた稚児を何処で海魔は奪ひ取ったか……。自失して行くものからかけかへのない子等を奪ひ取る位いは易いものなのだ。波の下で死を考へた時に神へ祈る気持ちと、走馬燈の如く父母兄弟肉親の顔が浮ぶ、其の時の心境は筆や詞に云ひ表はすことの出来ないものがあったであらう。

荒谷青砂里方面には比較的波が遅く廻り、自分の逃げて行く先から波を被った寄現象があった。斯くして海魔は僅々十数分の内に楽しかった団楽を奪ひ、父を母を子を財貨を永久に呑んでしまった。

波が落ち付いて流れ残った倒壊家屋の底から呻き声に交じって一刻も早く救はれたい気持から、肉親に救を求めて叫ぶ。又生残った者は子を求め、兄弟を求めて叫ぶ。声と声の交錯、阿鼻叫喚の巷だ、けれ共闇故に手のほどこし方がなく唯々声だけが寒い明け方間近かの夜空へこだまするばかりであった。身に負傷した者で明け方まで、意識があり、声を限りに救いを求めたが救ひ手も来ず、逃げ終へた人達の暖を取ってゐる焚火のホツト木の間を明けに染めてゐる有様を見乍ら世の無常を嘆き、寒さの為に此の世を去った人は、数限りなくあった亦浪からのがれて蘇生したかと思う間もなく倒壊家屋の下しきになって、発火した火煙に包まれみす〳〵自己の名を叫び乍ら昇天した四十数名の人もあった。

漸く夜が明けはなれると前夜にひきかへた晴天で朝の太陽が地をあたゝめてゐる。平和な光線か余りにも憎らしい四辺は荒野と化して、屍は累々として転んでゐる。

第二章　避難状況

（一）大平方面

地震後約三十分、急速な退潮の音に臥床をけった者が多数だった。「津浪だ」誰やらの無意識な叫びに飛起きた幾人かもあった。

闇をついて、転び、おき、つまづき、わめき、ひたすら日枝の境内へ急坂を駆け上る。見えない恐怖に耳をそばたて乍ら……。

拝殿前は一杯の人だ。闇に狂ふ響に恐怖を刺激されつゝ夜明を待つ人達の私語も小さかった。

この方面は堤防にさへぎられて波が弱く、二階のみ残った家、方向を変へたゞけの家すらあった。

（二）小林方面

用水の準備を整へて再び寝に就いた。津波を連想した幾人かも闇の夜空に砂浜を洗ふ波音のゆるい響きに安心しきったものゝ様に。

ノン〳〵〳〵〳〵強い波の響だ、すはとはね起きた時に電灯の灯も消えた。湾口に溢れた波は一線をひいてこゝに流れ込んでゐるのだ、小林の沢と稲荷堂のあたりをめざして人々は狭い一米巾の小路をひたむきに走しった。波に呑まれた者の悲痛な声もまじって波に崩れる家居の響が物凄い。

街を斜に学校めあてに走った者の殆んど全部は痛ましくも海の犠牲となってゐる。

（三）町方面

地震直後家族をまとめて避難した者もあったが、他の多くは再度臥床に這ひこんでゐた。湾口につき当る波の響をきいて津浪を感じ戸外に出た、あたりは人の波だ、人々は恐怖に多くも語れず、押しあひ〳〵赤沼山をめあてに駆け上った。

湾口からぢかに押して来た波と、小林にあてゝ廻った横波でバリ〳〵〳〵家屋が崩れてゆく。この響に恐怖して山へ一歩のあたりに坐り込んで波にとられた者も少くはなかった。

（四）川端方面

再度の眠りを求めた者の殆んど全部が波に呑まれてゐる、めあては赤沼山、道は川筋路から郵便局前に抜けて小路を幾曲りかするこみいった地形。

郵便局前からの小路でつまづいた者に折れ重った人の群がそのまゝ波に呑まれてゐる。家族全滅の戸数はこの方面に多い。

（五）川向方面

畠を横ぎって山に走しる者、高橋に出て赤沼山に向った者。いづれも早く警戒したものは無事避難し了へたが、後れて人波にさへぎられ、垣に当って方向を失ひして左からの横波に呑まれた者も多かった。

（六）荒谷方面

一昨年の長内川護岸の結果被害は比較的に少く、浸水だけで済んだ家屋が十数軒もあった。避難場所は熊野神社境内。

小林に突きあてゝ崩れた横波が、町、川向方面の家屋を荒谷の沢に集め、そこから発火して四十数名の魂を奪ひ去ってゐる。赤沼山の麓に悲しくも「凍死」と爪跡を地上に印して死体となった者もあった。

（七）乙部、青砂里方面

小林方面を襲ふ波を眺め乍ら避難した者のある程十分余裕があった、しかし波の強さは引波の故か強く青砂里沢の奥へ曲り〳〵突き進んで殆んど全部の家屋を崩してゐる。避難者の多くは日陰山に寒い一夜をあかしてゐる。

第三章　被　害

恐怖の一夜が明けて、初めて目にする惨状は文字通り凄惨そのもので、田老乙部の両市街は僅かに数戸の民戸と高地にある役場、学校、寺院を残すだけ殆んど全市街が流失してゐた。

うづ高く積まれた家屋の破片と数百の死体をながめた二千の生存者は、不帰の客となった家族と明日の生活を思って唯自失するだけだった。

港は流木の山、街は一夜にして荒野……自然の暴威は余りにもむごい。唯涙で一日が暮れた。

□

自失の幾日か過ぎた、尊い隣人受に救はれた罹災者は、やうやく市街の取り片づけに働き初めた、村当時者は被害の調査に復旧に不眠の努力をつゞけた。

かくて五月二十一日、村役場発表になる被害見積総額は**貳百九拾万八千七百五十五円**の巨額であった以下之が詳細を明示すれば。

一、罹災戸数及罹災者数　（括弧内は全付戸数及全人口を示す）

罹災戸数	（八三四戸）	五〇五戸
罹災者総数	（四九八三名）	二七三九名
死亡者		五四八名
行方不明者		三六三名
計		九一一名
罹災生存者		一八二八名
内　負傷者		一二二名
孤児となりしもの		六名

上表より特に抽記すべきものは、家族全滅の戸数六十六戸その家族数三百三十五名（死亡百六十五名行方不明百七十名）を算する事である。

二、建　物

①住　家	六四二、〇〇〇円
流　失	四二八棟
床上浸水	四棟
床下浸水	四棟
②非住家	一三〇、八〇〇円
流　失	二一八棟

三、土　地

宅地	三二、〇〇〇坪	三二〇、〇〇〇円
田地	二町	二、〇〇〇円
畑地	一二五町五反	七七、五〇〇円
畦畔	六、〇〇〇坪	三〇〇円

四、道路河川橋梁その他

道路	四、八〇〇ᵏ	一五、〇〇〇円
橋梁	一〇五	四、〇〇〇円
河川	一、二〇〇	六〇、〇〇〇円
井戸	七一	四、二六〇円
堤防	二、〇〇〇	四、〇〇〇円
水路	三〇〇	三〇〇円

五、漁業関係

無動力船	八九五艘	八九、五〇〇円
有動力船	一四艘	七一、〇〇〇円
漁具		一〇、九八〇円
船具		九、八五〇円
網具		二八、五〇〇円
魚粕		六、二五〇円
魚油		一、二〇〇円
海藻類		二、五〇〇円

その他　二五、〇〇〇円
六、農耕地
大麦　五三町五反（収穫皆無）一三、三七五円
小麦　二五町（〃　）七、五〇〇円
桑畑　一〇町（〃　）一〇、〇〇〇円
七、林産関係
流失木材　六八、五〇〇円
流失薪炭　六七、五〇〇円
八、家畜類
牛馬豚　九、〇一〇円
鶏その他　一、三八〇円
九、食料品、衣服、その他
食料品　二五八、五〇〇円
衣服類　一四二、八〇〇円
薄団　二五六、〇〇〇円
箪笥　一七五、〇〇〇円
家具類　二八六、〇〇〇円
金銀貨紙幣等　一二八、五五〇円
十、通信（田老郵便局調）
流失郵便物二百、其他の書状全部
電信電話線二粁、局舎用器具全部
合計　五千余円
十一、消防組（田老消防組調）
提灯、被服、トビ口（第一、五、六部用全部）
屯所　三軒　火の見　四ヶ所
腕用ポンプ　三台
合計　八千三百四十余円
十二、電灯会社（盛岡電灯株式会社田老詰所調）
倉庫品（電線、変圧器、電球、その他全部）
電話機　建具、什器、全部
需用家屋内取付器具（八一八灯）
引込線（四〇九箇所）電柱（八五本）
合計　一万二千九百余円

第四章　救護と慰問

一時は呆然自失の体であった人々に力となり且つは元気づけとなり起死回生の思を与へたものは、救護慰問の手であった。然も急速に放はれる事の出来たのは村当局の処置よろしきを得たからである。

（三月三日午前七時態夫ヲ以テ發送セル救ヒヘノ第一信）

昭和八年三月三日
田老村長　關口松太郎

岩手縣知事殿
下閉伊支廳長殿　（各　通）

海嘯襲來被害急報及救助方ノ件

今曉午前二時半頃豪震アリ暫ラクシテ大海嘯襲來本村聯擔地ハ勿論海岸部落約五百戸全滅シ人畜ノ死傷無數ナリ差當リ救助ヲ要スルモノ左記ノ通リニ候間急速何分ノ御措置相仰キ度不取敢報告ヲ兼ネ及上申候也

追テ役場、小學校、無事ニ有之候ニ付申添候

記

一、食糧及炊事用器具ノ給與
一、衣類ノ給與
一、假小屋ノ設備費ノ給與
一、負傷者救護ノ爲メ醫師ノ派遣

以上

一、救護

①炊出し

幸いに命を拾った人々も只着のみ着のまゝ身を以て逃れた者許り。喰ふに食無く、着るに衣無く空しく飢えと寒気に悩まされるのみだった。此の時に当って附近部落民は逸早くも炊出しを為し、朝食昼食代りに配って呉れた。更に村に於ては宮古町より白米の供給を受け、三日夕食より神田自警団に依頼して、学校に於て炊出さしめ、尚引続き県よりの配給米に依って三日二十五日まで炊出しを続け其の後も四月末日までは家族数に応じて米、味噌を配給し、更に其の後と云へども生活状況に応じ、特に困窮せる者に対し白米を支給しつゝ今日に至った。

②収容所としての学校

飢えと寒さに怯えた罹災の人達はひたすら学校へ〳〵と避難して三日の夜はさしもの校舎も此等の人々で階上階下（階上十室、階下九室講堂共に満室の有様で、加ふるに各方面からの救護班、応援隊の仮泊するに及んでいよ〳〵狭隘混雑を極めた。

此れが整理上各室を避難者収容室、患者収容室、救護治療室、救護班応援隊仮泊室等に区分して収容したが、折角遠方より来た応援団が講堂にも入れず、あの寒空にテント一枚の夜営を余儀なくしなければならなかった。

斯く多人数の雑居生活の為、火災盗難及び其の他の警戒をかね、学校職員交替に不寝番を定め、田老村自警団、消防隊と共に巡視に当った。

巡視中病室の、ほの暗い燭下にあって、同室の患者達にみとられ乍ら、哀れにも息を引取ってゆく幾人かもあった。

避難者の収容数は

三月十二日	一一九家族	四五一名	を最高とし、それより次第に減少して
三月十八日	一〇〇家族	三七二名	
三月二十日	三一家族	一四〇名	
三月三十日	七家族	二三名となり四月一日新学期開始と共に全部の引上をみた。	

然し学校職員の多くは四月になっても移るべき家なく為に止むなく学校の一室で共同自炊を続けた。

③警羅

イ、宮古警察署、盛岡警察署、日詰警察署等より二名以上、十数名の警官出張応援、六月初旬に至るまで学校の一室を岩手県警備警官室として治安維持並びに衛生方面に亘って活躍の上帰還。

ロ、本村駐在所は全く流失し、照井巡査は辛うじて家族と共に逃れたが、直ちに役場を以て仮駐在所として応援警察官と共に各方面に亘り懸命に勤務に当った。新築駐在所は十二月二十日落成。二十二日より此れに移転。

④バラック建造

罹災者救助応急施設として県の敏速なる活動と村内及他町村応援団の労働奉仕を得て三月八日バラック建造に着工、小林区に五十一戸分（小林、大平方面の罹災者一五三名収容）町区に五十五戸分、（町川向沖方面の罹災者一九五名収容）荒谷区に五十戸分（荒谷、川向の一部、乙部、青砂里の罹災者一六七名収容）三月十二日全部落成。一棟を五戸分とし、一戸は間口二間奥行二間半、側は杉板一重張り、屋根は杉皮を以って葺き雨雪寒気を凌ぐには余りにも粗製のものであった。

村当局は、三月十五日より此に移るべき旨通知を発し、三月末日には殆んど全部がバラック生活に入った。

然し一旦バラックに移って後も人心は尚治まらず、十数日の間は夜に入れば、学校寺院等に夜具を運んで一夜の夢を結び、又波の高い時、或は地震のある日は兢々として逃げまどふ有様であった。

バラック生活は一室（三坪）に数家族、或は一家族数名の雑居所帯で、狭隘不便不潔実に見るも哀れな状態であったが幸ひに時未だ暑期に入らず、消毒も充分に行はれた為伝染病も発生せず、冬季に入った今日尚一名の伝染病患者をだに発見し得ない。

⑤当村消防組、自警団と他村町よりの応援隊

イ、田老元村の消防組は殆んど総てが災害に遭った為、当日は勿論数日後に至るも、団体的行動は出来得なかった。然し此れ等の人々の中にも個人約自覚の下に、或は人命救助に、火災消火に或は災害地の後片付けに懸命の働きを為した者も少くなかった。災害を受けることの少なかった樫内、青野瀧、摂待、水沢及び災害を被らなかった末前、小田代、神田部落は夫々団体的に炊出し、患者収容、災害地後片付け、バラック建造、慰問品運搬等各方面に亘り応援活動に当った。

ロ、他町村よりの応援隊

鍬ヶ崎青年団	三日間	延三〇名
鍬ヶ崎青訓	三日間	延六〇名
宮古消防組	五日間	延一二二名
宮古軍人分会	二日間	延三二名
千徳村根市自警団	三日間	延九三名
千徳村青年団	一日間	二五名
千徳村消防組	四日間	延一四〇名
千徳村軍人分会	三日間	延一一〇名
花輪村消防組	二日間	延五〇名
花輪村青年団	二日間	延五四名
宮古青年団	一日間	一五名
宮古天理教会	一日間	六〇名
宮古大工組合	五日間	延二五〇名
宮古建築指物組合	五日間	延一一三名
宮古水産学校	三日間	延一一三名
茂市村軍人分会	一日間	延一〇五名
茂市村蟇目消防組	二日間	九名
川井村軍人分会	一日間	延四三名
刈屋村青年団	一日間	一三名
刈屋村消防組	一日間	一〇名
花輪村軍人分会	三日間	延四八名
磯鶏村青年団	二日間	延一二一名
磯鶏村軍人分会	一日間	三八名
磯鶏村金浜自警団	一日間	二八名
磯鶏村白浜団	一日間	二〇名
崎山村青年団	二日間	延三〇名
崎山村軍人分会	四日間	延一〇六名
山口村青年団	一日間	三〇名
山口村近内青年団	一日間	一五名
山口村田代青年団	五日間	延一八四名
山口村和美自警団	一日間	二三名
山口村軍人分会	三日間	延九七名
山口村田代軍人分会	二日間	延三六名
山口村田代部落民	一日間	四名
岩手郡篠木青年団	四日間	延一一五名
紫波郡水分青年団	三日間	延三九名
盛岡市少年団	一日間	一〇名
岩手郡田頭青年団	四日間	延九二名
刈屋村軍人分会	四日間	延六四名
津軽石村青年団	一日間	一五名
津軽石村軍人分会	一日間	二〇名
有芸村青年団	五日間	延七〇名
小本村消防組	一日間	五四名
大川村青年団	二日間	延二二名
騎兵二十三連隊	一日間	二〇名
盛岡市青年団	四日間	延九〇名
岩手郡土淵青年団	一日延	五〇名
盛岡市下橋青訓	四日間	延三三名
岩手郡厨川青年団	三日間	延七〇名
岩手郡浅岸軍人分会	四日間	延四四名

岩手郡滝沢青年団	四日間	延一二〇名
騎兵二十四連隊	二日間	延二四名
上閉伊郡土淵青年団	三日間	延一五〇名
和賀郡藤根村長沢青年団	四日間	延四八名
稗貫郡石鳥谷青年団	四日間	延一一二名

⑥救護班

罹災者、傷病者に、救護治療の手が如何に待たされた事か。岩を噛む激浪に押し流されて虫の息にありながら、よく息吹き返し得たのは全く治療救護の力である。然し辛うじて村人達の手に依って救はれながら、不幸治療の手を待ち得ずして、あはれ他界した人々も少くはなかった。

イ、下閉伊郡医師会救護班は当三日直ちに工藤、小松両医師外看護婦二名来援、深夜まで不眠の活動を続く。

ロ、岩手県救護班……三月四日来援
和泉、細谷両医師、藤田薬剤員、外看護婦六名、滞在日数最も長く、小学校一教室を治療室兼居室とし、三月三十日迄治療。尚其の後約一ヶ月間引続き藤田薬剤員居残り、衛生事務を担当せり。

ハ、第八師団救護班（弘前部隊）……三月四日来援
学校の一室を治療室とし。内山二等軍医、吉田特務曹長、佐藤上等計手、斉藤二等看護長、佐々木伍長、看護兵六名、歩兵四名、輜重兵八名、三月十日帰還。

ニ、仙台大学病院救護班……三月六日来援
学校の一室にて治療。
富永、根本両医学博士、川野、千葉両医学士、桶田薬学士、畑谷事務外看護婦五名、三月八日帰還

ホ、仙台逓信局救護班……三月六日来援
学校の一室にて治療。
芳賀逓信局嘱託、清水、柴田逓信局書記、丸山簡易保険局書記、佐々木通信局嘱託津田看護婦三月八日帰還。三月十三日重茂方面より再び来援。

ヘ、日華生命救護班……三月十日来援
加入者に対し、手拭フランネル等配布。

ト、横浜市救護班……三月六日来援
学校の一室を治療室とす。
高橋陸軍一等軍医正、川辺横浜市社会課員、外看護婦三名。三月十一日帰還

チ、東京市十全病院救護班……三月六日来援
医師二名、看護婦二名。　三月九日帰還

リ、岩手県キリスト救世軍　三月十一日、消しゴム、鉛筆等配布

ヌ、キリスト教連盟救護班
三月十二日、タマシン、アレン女史外四名、ビスケット、食器等配布

ル、日本赤十字社岩手支部救護班……三月十日来援
仙台大学病院の後に入る。
菅野医師、加藤薬剤員、外看護婦三名。三月二十一日帰還

ヲ、仙台逓信局巡回健康相談所……十月六日来援
逓信局嘱託安本医師、大塚書記、外看護婦一名、学校にて、九十五名診療、七日帰還

ワ、岩手県罹災地救療班
五月より小野崎医師、金谷看護婦、毎月二回（五日より十日まで二十日より二十五日まで）巡回小学校の一室にて診療、十一月十一日を最後として引上ぐ。

カ、恩賜救療済生会
三月六日より五月十五日まで済生会治療券交付、重傷者二十九名、宮古病院及高山病院にて治療。

ヨ、岩手県衛生課防疫事務嘱託
白間福治氏、三月二十四日より六月三十日まで勤務。

タ、社会看護婦
杉下看護婦五月二十二日より七月二十九日まで、舘下看護婦

八月一日より現在（昭和九年三月）勤務中、毎週月火木金の四日間学校へ出張勤務。

レ、宮古理髪業組合

三月二十日三十名来援、学校の一教室を借りて無料散髪を為す。

⑦逓信省の非常施設

イ、簡易保険非常払ひ

保険局より丸山、門谷、佐竹、高橋書記、逓信局より柴田書記出張。三月七日、八日、九日の三日間、払渡しに口八七、払渡し金額一万五百円。

ロ、簡易保険非常貸付け

同　前　貸付け口一二、貸付金額八百円

ハ、郵便貯金非常払ひ

三月六日より三月三十日まで、払渡し口一八、払渡し金額一千六百二拾円

ニ、郵便局舎は全部流失し、事務員一名、逓送手二名、集配手一名死亡、電信、電話器総て流失の為通信機関全く杜絶の状態なりしりが、翌四日直ちに学校前の半壊家屋を応急仮局舎と定め局長以下全局員は、応援者盛岡郵便局佐々木主事、仙台逓信局宮野事務員、宮古郵便局佐々木、堀坂両事務員等の援助を得て活動。六月四日現在の仮局舎に移転。

二、慰　問

①勅使大金侍従御差遣

三月九日、災害後の取片付けも未だ完了せず、惨害の涙又乾かぬ折から、親しく罹災状況御視察有難き御慰問の御言葉を賜はる。聖慮の深きを拝し、罹災民均しく感激恐懼す。

②皇室の御恵み

イ、三月十八日御内帑金総額三万円の内、当村へ七千五百円御下賜。

ロ、四月一九日　皇后陛下より治療二十日以上を要するもの及び孤独者二十四人に対し、衣服地一反裁縫料御下賜。

恩賜金配給一覧表

	配給		配給金額	平均		最高	最低	恩賜金
	戸数	人員		一戸当	一人当			
	四九七	一二八五	七五〇〇円〇〇〇	一五〇円〇九〇	六円三九	六〇円〇〇〇	一円〇〇〇	

③主なる来訪者

農　林　大　臣　後　藤　文　夫
陸軍大臣代理陸軍少将　谷　壽　夫
内務省社会局長官　丹　羽　七　郎
岩手県知事　石　黒　英　彦

六月十八日正午石黒長官以下数氏海路田老着、多数村民の出迎ひをうけ一行は直ちに役場にて昼食を取り、次いで復興計画書等に関して関口村長との間に種々質答や指示等があり、終って二時間に亘って綿密なる全地域の実地踏査を為す。調査終了後小学校にて職員一同に対し激励の言葉あり、引続き講堂に於て参集の村民に一時間十五分の長きに亘って、或は戒しめ、或はこれを激励して集まれる千余の村民に強き感銘を与へて降壇。更に校長室に於て戦死者遺族に対して懇ろなる慰問を為し多数村民の見送りを受けつゝ、午後六時宮古に向けて出航。

岩手県会議長　佐々木　保五郎
岩手県会議員　中　村　左　市
騎兵第二十三連隊長代理中隊長　江　戸　清　助
海軍大臣代理海軍大佐　河　瀬　四　郎
八戸市会議員　武　藤　憲三郎
救世軍東北連隊長　張　田　豊次郎

日本医師共済生命保険相互会社　石　井　峰　吉
岩手支所長　中　村　謙　蔵
盛岡市長　大　森　新　陸
地方事務官　盛岡仏教々会一同
津軽石村長　大　槌　若三郎
整復士講堂館五段　舟　越　梧　郎
権大僧正　荒　谷　養　壽
和賀郡土澤別院　工　藤　瑞　導
宮古町長　伊　東　元　介
大日本連合青年団理事田澤義輔代理　鈴　木　徳　一
下閉伊郡仏教会代表者　三　浦　文　堂
理学博士　今　村　明　恒
下閉伊支応長　佐　川　盛　造
日本赤十字岩手支部主事　高　橋　小兵衛
第二回漁村青年指導者講習会講師大日本連合青年団主事秋山氏外八名及講習生田子代議士外百十名　八　角　三　郎
衆議院議員　古　川　中　将
第八師団留守司令官　宇佐美　澄　恵
和歌山県高野山遍照光院執事　菅　井　豊　文
横須賀鎮守府長官代理海軍中佐　平　塚　四　郎
横浜憲兵隊本部憲兵大佐　高　橋　正　雄
野砲兵第八連隊長代理砲兵中佐　國　崎　登
盛岡連隊区司令官歩兵大佐　安　光　元　一
仙台逓信局長　平　井　宣　英
簡易保険局長　棒　葉　可　省
青森営林局長　平　野　三　郎
同　事務官　小　松　茂
簡易保険局経理課長　高　島　三　郎
農林省水産局長　奈　良　七　郎
仙台税務監督局属

④慰問品寄贈者

衣類筵包六個　崎山村長
学用品小包一個　宇都宮昭和小学校　谷内滋郎　谷内純子
白米十俵　津軽石漁業組合
同　五俵　水産学校
衣類筵包四個　宮古町菊池長右ヱ門
手拭石鹸小包一個　東京日本橋白木屋地方係
衣類六点　豊間根村荒川一女
衣類五点手拭三点　磯鶏村高浜近江幸七
白米三俵　宮古町常安寺
反物三点手拭三点　東京市北多摩郡山村内野タツ
衣類十五点布団一点　秋田県由利郡金浦町大竹小学校内今野清男
木炭五俵味噌一樽　田老村末前小向源七
衣類玩具小包一個　無名氏
薬品箱入個四　東京市外野方町下池袋生歳薬剤会社
足袋七十足　宮古町宮田生命代理店坂下八郎
雑品筵入一個　日本ホーリネス教会中田重次郎
衣類三点　長野県東筑摩郡波田村大田ひさの
薬品九点衣類七点　山形県飽海郡遊佐村高橋哲郎
手拭二点　横浜市西伊場高柳新一郎
衣類六点　堺市錦之町葛村安兵衛
衣類十三点　静岡市井宮町花本作太郎
梅漬箱入一個　東京市蒲田大和美郎
衣類六点

薬品小包一個　稗貫郡花巻町照井政吉
雑品四点衣類六点　大阪市東成区南生野町大塚貫一
手拭三点
衣類練乳小包一個　銚子市伸之町長谷川三郎
蝋燭小包一個　静岡県伊豆仁科郡司拜治
衣類五点　東京市大森区馬込一貧生
ゴム長靴小包一個　無名氏
雑品叺入三個　東京市中野高等女学校
衣類十六点　福島市信夫山下キリスト教会内有志
日用雑品七七三点　花輪小学校
食料品一六一点
衣類雑品筵包箱入各二個　八戸市役所
雑品箱入三個　東京市浅草区北田原町加治井春三
衣類叺入三個　東京市淀橋区天理教救護班鈴木作平
慰問袋箱入二個　東京市麹町区大妻技芸学校
衣類叺入二個　大妻高等女学校
学用品箱入二個　新潟刈羽郡高浜町猪沼氏外六名
薬品医療器箱入四個　横浜市神奈川区岸平蔵商店
生芋二俵　東京市赤坂青年団
薬品箱入一個　函館市恵美寿町安藤
足袋二百点毛布二十点　大阪市東区餌差町塩谷商店
衣類小包一個　宮古町高橋京三
衣類小包一個　東京市小石川区白山御殿佐藤美逹夫
衣類箱入一個　埼玉県南埼玉郡柏壁町岡村松三
薬品袋入十個　東京市本所区東駒形飛田釦制作
衣類小包一個　所石井、飛田
　盛岡市加賀野岩手公論社田鎖凌山
　東京市杉並区上井草町同潤会有志
キャラメル箱一個　東京市杉並区上井草町
子供帽子二五点　東京女子大学生林マツ子
学用品玩具三〇点　長野県諏訪郡川岸村浦野歯科
衣類五点梅一樽　群馬県北甘楽郡富岡町
木炭十八俵　加藤一郎方るい
木炭二俵鶏卵大根二十個　田老村末前青年団
　田老村末前上山清助
ビスケット箱入二個　仙台市北一番町
　救世軍東北連隊長張田豊次郎
菓子箱入三個　福島市腰浜天理教教務支応長
手拭二六七点　仙台市東三番町東本願寺東北別院
東京日日新聞　自三月六日　至三月末日　五十部宛　東京日日新聞社
東京朝日新聞　自三月五日　至三月十一日　三十五部宛　東京朝日新聞社
東京時事新報　自三月九日　至三月十二日　二十部宛　東京時事新報社
岩手日報　自三月九日　至三月十二日　二十部宛　岩手日報社
毛布四十点　東京市主婦の友社
鍋一点ヤクワン一点　岩手郡田頭青年団
衣類一個　石川県能美郡港村中村太郎
醤油一樽　宮古町鈴木定治
ノート一箱　盛岡市赤沢号本店
衣類小包二個　神奈川県鎌倉郡片瀬白井由紀子
慰問袋十点　東京市小石川区大塚坂下工藤
衣類三点　東京市大森区雪谷町露本アキ子
学用品五五点　福島県石川郡山白石小学校

小学校教科書一二八〇　東京市小石川区表町淑徳高等女学校
衣類八梱　東京市杉並区上井町同潤会代表
　三浦美代子
学用品四五〇点
薬品二〇〇点　盛岡市北川教浮寺内美友少年団
乾餅三叺　岩手郡篠木小学校
白米十俵　宮古漁業組合
雑品野菜筵包各一個　茨城県立下館高等女学校
雑品筵包四三個　横須賀市長大井鉄丸
衣類五点慰問袋一点　栃木県那須郡珂村小川吉成文夫
鍋七〇点脱脂綿入月経帯小包一個
　盛岡市関口市兵ヱ
莫産二〇点ナショナルランプ五個
　同
衣類十四点　仙台市東北帝大法文学部学生
　武井昌一外二名
衣類八点　東京市赤坂区永川町杉本四郎
衣類八点足袋六点　仙台市川内川前町三田地壽典
学用品箱入四個　東京市浅草区清島小学校
　同小石川区高師附属小学校児童一同
　東京女子師範附属小学校児童一同
　東京青山師範附属小学校児童一同
　東京赤坂小学校児童一同
衣類十四点　和歌山県箕島町教念寺今井清住
衣類大梱二個　キリスト教婦人矯風会福岡支部
　博多メソヂスト教会婦人会
　福岡メソヂスト教会婦人会
　ルーテル教会婦人会
　総合会婦人会
味噌十二樽　岩泉消防組
衣類石鹸洗面器等一梱　盛岡市内丸幼稚園
ノート三〇〇冊　武州狭山繁田武平
薬品一〇〇〇点　富山県上新川郡浜黒崎吉田久三
八寸コンロ一五〇個　宮古町高岩庄一
小学生用鞄十ヶ　宮古町小成三郎
衣類三包　日本キリスト教連盟
半紙五〇〇帖　鍬ヶ崎念仏講中
衣類二梱　盛岡市内丸岩手キリスト教連盟
衣類一梱　岐阜市柳ヶ瀬町照井きた子
衣類叺入一個　新義真言宗豊山派
　岩手直轄事務取扱久米真興
衣類筵包一個　宮城県宮城郡浦戸村
学用品一包　石浜小学校長千葉金三
手拭二二五〇点　同村石浜女子青年団長高橋なみえ
⑤金銭寄贈者　東京市清和婦人会
金拾参円　山口村
金拾円　中居喜代治
金貳円　平野梅吉
金貳拾円　天理教東京教会支応
金貳拾円　天理教岩手教会支応
金参拾円　曹洞宗務院
金五円　一国民
金五円　市村信胤
金拾円　小川村
金拾円　織笠村波岡茂樹
金貳拾円　有芸村
金五拾円　盛岡電気社長

金五百円　東京日日新聞社
金壹円　川原田尚城
金五円　林元子
金五円　宮古常安寺阿部文雄
金壹円　佐藤勝繁
金貳拾円　千徳村長根寺住職新山英賢
金拾円　農林事務官中尾章吉外三名
金貳拾五円　横浜市救護班代表高橋尚三
（内五円青年団、十五円小学校、五円消防組）
金五円　東京市中野高等女学校
金参拾円六銭　千葉中山小学校
金拾五円　安家村
金貳拾円　出口王仁三郎
金五拾円　岩手キリスト連盟
金拾円　宮古町昭和館
金貳円　岩手郡篠木青年団支部
金八円参拾貳銭　市立盛岡幼稚園
金六円　筒井甚一外四名
金拾円　光の村代表国崎俊郎
金五拾円　宮古町石井吉太郎
金参拾円　東京市霊岸坂キリスト教会
金拾円　岩手県警部補猿川謙吾外十九名
金壹円五拾銭　田老村末前女子青年団
金五拾円　気仙沼町
金五百八拾円八銭　横須賀市
金四円　大瀧正覚
金拾円　高山遍照光院
金壹万五千円　東京朝日新聞社
金拾円　金光教盛岡教会所
金五拾円　日本ホーリネス教会
金参拾円　大阪天満教会
金五円　日本キリスト教会信徒有志
金拾円　東京市中央青年団
金拾円　鍬ヶ崎漁業組合
金参円　宮古漁業組合
金拾円　松尾善之助
金六円　田老村小田代組一同
金壹円　田老村小田代青年支団
金参拾円　宮古町日本キリスト教会信徒有志
金拾円　岩手県キリスト教連盟災害救護会
金四円　キリスト教婦人矯風会小樽支部
金五円　茨城県立下館高等女学校
金貳百円　盛岡市仙北町佐々木フミ
金四百五拾円　東京市大森区青年団入新井分団
金拾円　代議士熊谷巌
金壹円　岩手県技師渡部幸三郎
金拾円　富山県藤本長松
金六百五拾円　平島雄八郎
金壹円　人類愛護会
金壹百円　山形県立明星会有志
金光教救護団
金百五拾円　岩手県キリスト教連盟救済会
（漁船建造費として）
金参拾円　愛国婦人会宮古委員区
金五拾円　盛岡市長
金九拾円七拾銭　熊本県山鹿町
金四百壹円参拾八銭　下閉伊支応会送の分
金拾貳万八百貳円参拾参銭
岩手県募集の義捐金にして本村に配当の分
内金八万六千八百六拾壹円　生業資金として

内金貳万五千円　生産施設援助として
内金壹千三百円　死者弔慰援助として
内金七千六百四拾壹円参拾参銭
災害予防及備荒施設として
金五千五百九円拾銭　岩手県教育会
内金参千貳百参円貳拾銭　尋常科三六四名分給食費
内金壹千五百七拾七円九拾銭　同　被服費
内金七百貳拾八円　同　学用品代

⑥給与品慰問品の受入配給

当村役場は幸ひに災害を免がれたが、不幸にも牧野助役を失った。然し他に異常無く、村長以下総動員にて罹災民救済に当り、慰問金品の受理配給に、或は後片付け事に、或は訪問者応援団、救護班等との応接、復興に関する事務、等々に不眠の努力をつゞけた。

支応（腹子政七県属等数名）宮古町役場等より応援者を得、新に阿部助役を迎へ、尚その他の応援者の協力によって、さしも忙殺された事務を滞りなく終へる事を得た。

◎給与物品受払一覧表

（一）白　米

月別	受入高	払出 罹災者給与高	払出 給与延人員	払出 応援団体給与高	払出 給与延人員	払出 計 給与高	払出 計 延人員
三月	二三二、六五〇	二〇九、五四六	五二三六四人	一〇、五三四	六八六六人	二一九、五九〇	五九、三三〇人
四月	二三二、〇〇〇	八九、二三〇	二六三六九	七、二八三	九九〇	九六、五三	二七三五九
五月	四六、〇〇〇	六七、九八〇	一八二五三	一、一三七	三五八	六九、一七	一八六一一
計	三八九、八五〇	三六六、六六六	九六、九八六	一八、九五四	八二一四	三八五、六二〇	一〇五二〇

（二）味噌

月別	受入高	払出 罹災者給与高	払出 給与延人員	払出 応援団体給与高	払出 給与延人員	払出 計 給与高	払出 計 延人員
三月	三六八、四九〇	二七九、四九〇	五二三六四人	八三、四八〇	六八六六人	三六三、四五〇	五九、三三〇人
四月	三三七、〇〇〇	三一〇、七〇〇	二六三六九	二一、三〇〇	九九〇	三三一、〇〇〇	二七三五九
五月	二三四、〇〇〇	二三八、四〇〇	一八二五三	三、八〇〇	三五八	二四一、二〇〇	一八六一一
計	九二九、九〇〇	八二九、〇〇〇	九六、九八六	九九、七〇〇	八二一四	九一八、七〇〇	一〇五二〇〇

（三）醤油

月別	受入高	払出 罹災者給与高	払出 給与延人員	払出 応援団体給与高	払出 給与延人員	払出 計 給与高	払出 計 延人員
三月	二四、六〇〇	六、四〇〇	五二三六四人	〃	六八六六人	六、四〇〇	五九、三三〇人
四月	七六、五〇〇	六一、六〇〇	二六三六九	二、〇〇〇	九九〇	六三、六〇〇	二七三五九
五月	二、八〇〇	二九、〇〇〇	一八二五三		三五八	二九、〇〇〇	一八六一一
計	一〇三、九〇〇	九七、〇〇〇	九六、九八六	二、〇〇〇	八二一四	九九、〇〇〇	一〇五二〇〇

（四）夜具及被服

区別	受入 給与品	受入 慰問品	受入 計	払出 罹災者給与高	払出 延人員	備考
布団（敷掛）	二三六枚 四三〇	一三 一四八	九三五枚	九三五枚	一七五六人	四人三五二対シ一枚
毛布	一八〇〇	五三五	二三三五	二三三五	一七五六	一人三付一三枚
外套	九〇五	—	九〇五	九〇五	一七五六	四一〇戸二対シ一枚
海軍服	一六二八		一六二八	一六二八		以上ノ男四九五対シ一枚
其他衣類	—	三五六九四	三五六九四	三五六九四	一七五六	十三才以上ノ男一枚
						一家二対シ三着
						一人二対シ一〇三ノ割

(五)什器

区別		受入 給与品	受入 慰問品	受入 計	払出 罹災者給与高	払出 給与人員	備考
鍋釜		八、二四	—	八、二四	八、二四	一、七五六	一戸二対シ二ケ
台鍋		四、二〇	—	四、二〇	四、二〇	一、七五六	一戸二対シ一ケ
バケツ		三、三七	—	三、三七	三、三七	〃	一戸二対シ一ケ
食器		四、七〇〇	—	四、七〇〇	四、七〇〇	〃	一戸二対シ一〇ケ
湯呑		四、八〇	—	四、八〇	四、八〇	〃	一戸二対シ一ケ
計		六、七五一	—	六、七五一	六、七五一		

(六)雑品

区別		受入 給与品	受入 慰問品	受入 計	払出 罹災者給与高	払出 給与人員	備考
筵類		一、八〇七㎡	一、六八〇㎡	三、四八七㎡	三、四八七	一、七五六	一戸二対シ八強ノ割
死体要品		一三	—	一三	八三	一、七五六	要求者二対シ
慰問袋		—	五、八六六	五、八六六	五、八六六	〃	一人二付三八ノ割合
履物類		—	七、四九四	七、四九四	七、四九四	〃	一人二付キ 大人三、二ノ割 小人三六ノ割
其ノ他		—	五、五一八	五、五一八	五、五一八	〃	
薬品		—	三、六六八	三、六六八	二、八五〇	〃	一戸二対シ五ケノ割
計		一、九三八	二四、三二六	二六、二六四	二五、二九八		

(七)ポンプ

区別	受入 吸水器	受入 鉄管	払出 吸水器	払出 鉄管	給与方法	備考
打込用ポンプ	一四九	一本十八尺物 三二六	一四九	一三六	三、一戸二対シ一本	四〇七

(八)学用品

受入	払出	備考
三二ケ	三二ケ	小学校へ回送

⑦義捐金配給

イ、村直接受領せる一般義捐金

第一回配給……六千二百四円　死者、傷者罹災世帯等に分類分て交付

第二回配給……壹万五千円　人員、世帯に分類

第三回配給……貳千四百四拾六円八銭　人員、世帯に分類して交付

第四回配給……七万四千貳百七拾七円　戸数割に交付

第五回配給……五百七拾参円六拾貳銭　戸数割に交付

ロ、東京朝日新聞社直接各罹災者へ交付義捐金

配給 戸数	配給 人員	配給 金額	平均 一戸当	平均 一人当	最高	最低
四九七	一、八二四	六二〇四、〇〇〇	一二四八二	三四二〇	四三、〇〇〇	三、〇〇〇

⑧慰問に関しての諸行事

イ、海嘯横死者追悼大施餓鬼

三月二十四日田老村清延山念仏堂に於て本郡仏教団各寺院住職全部出席の下に執行。

出席名士。熊谷代議士、前田内務部長、佐川支応長、亀井水産学校長、各官衙長

ロ、金光教慰霊祭

五月十一日学校裏に祭壇を建築して挙行。死亡者の遺族に対し供物（反物、菓子）を配布

ハ、罹災者慰問活動写真

六月十六日朝日新聞社主催の下に小学校講堂に於て挙行。

ニ、国民更生映画会

九月十六日岩手県社会課主催の下に小学校講堂にて、震嘯罹災者慰安、自力更生の気風振作の為挙行

ホ、仙台逓信局罹災者慰問活動写真

十月二十日山戸事務官外二名来村挙行。

ヘ、海嘯横死者教員並児童追悼会

六月十日宮古町常安寺に於て、下閉伊郡教育部会総会終了後厳かに執行。岩手県教育会長代理黒金女師校長、下閉伊郡教育部会長佐川盛造氏の弔詞に次いで生徒代表より左の弔詞を述ぶ。

弔詞

想ひ起せば三月三日。私共には如何に恐ろしい日でありましたらう。あの夜村の人々は皆一日の疲れをゆっくりと寝に就いて居りました。處がその時にはかに大地震が起ったのでした。そして間もなく恐ろしい〳〵夢にも思はなかった大津浪が凄じい勢で襲來して來たのでした。あんな恐ろしい事があらうと誰が豫想し得たでせうか。それのみか人々は地震直後何の不安もなく寝込んで終ったのでした。

そして敷刻の後には哀れにも、海の彼方に流し出され或は家の下敷となり、或は下敷となった儘火災に見舞はれて無惨の燒死を遂げたり、實に云ふに云はれぬ苦しみを受けて惨死なされたのでした。皆様はどんなにお苦しい事でしたらう。

あの津浪さへなかったなら、あんな惨めな最後は、なさらなかったらうに……。

そして又辛らうじて生き残った私共の中にも御兩親を亡くした人、又は兄弟を失った人、或は又御兩親始め兄弟をも失ってたった一人となった人等可愛さうな人々許り居ります。又私共の學校では日頃親しく御教へ下さった元田先生と赤沼先生とお別れして、皆深い〳〵悲しみに沈んで終ひました。その上更に毎日〳〵樂しく遊んだり勉強した百七名の友達をも失って終ひました。あの津浪さへなかったら、今頃は皆さんと一所に幸福に學校にも通って居りましたらうに……考へて見ますと本當にあの津浪が憎らしくてたまりません。運命とは斯の様な事を云ふのでせうか。若し此れが運命と呼ばれますものなら、私共の運命は何とのろはれたものでしたらう。

然し皆様方どうご御安心下さい。

世の中の人々は懇ろに皆様の冥福をお祈りして居ります。

そして生き殘った私共は皆様の身代りになって一致協力田老村の復興に當らうと決心して居ります。

そして元よりも増して立派な村を建設しようと覺悟して居ります

何卒昇天なされた皆様方よ、私共の此の微意の程を汲まれて御永眠下さい。

謹んで想ひの一端を述べて弔詞と致します。

昭和八年六月十日

田老尋常小學校兒童総代高等科第二學年　吉永義夫

高等小學校兒童総代高等科第二學年　吉永義夫

第五章　復旧復興

救護に、慰問に、温かく差し伸べてくれる同胞の隣人愛に感謝しながらも、日を経るに従ひおぼれてはならぬ、立たねばならぬと村人全部に復興への機運が漲りはじめた。時利に敏捷な商家は、堪え間ない余震と波音におびえ乍らも開店し、生存の村民は、宅地耕地の全部を埋めた海砂の取方づけに懸命に働いた。家屋の建築は、町、大平方面に早く順次小林、荒谷方面に及んだが、その全部が、僅かに雨露をしのぐだけのもので、地の利に支配される事の少い農漁家の多くは、山手方面を求めて赤沼山、田ノ沢、学校附近を選び、田老川に沿った低地は倉庫、作業場以外にみる事を得ない状態であった。

村当局は直ちに国庫及び県の援助を得て農家二〇七戸に生業に必要なる補助支給を計画し。

耕地復旧費		半額国庫援助
農具		現品八、三〇〇円代
納屋建築費		五、二〇〇円
種子		
馬鈴薯		六四〇俵
大豆		二五石六斗
甘藷苗		二六、二四〇本
蔬菜種		二石五斗
雑穀種		二二石四斗

を支給配布して復興耕作に従事せしめ、漁業組合においても組合員全部に漁具を購入分与し、小漁船（サッパ）を建造分与の上早くも六月中旬ワカメの採収に就業せしめた。

かく暴威の跡に、新しい努力が積まれるに随って今後再び繰返すであらう惨禍への永久的防浪の施設が叫ばれ、復興委員会の組織が成るに至った。

一、災害復興工事計画

（田老村災害復旧工事平面略図参照）

（一）市街計画

諸学者は同声に「**高地移転**」の意見を述べられたが、約五百戸の家屋を移転するの難事と、適当なる高地が附近に見当たらぬ事から、防浪堤を築造して市街をこの内に造る事とし県道及び之に併行する路線（自一号線、至七号線）数本を幹線とする市街をつくり、可成多数の避難道路を設ける事とし、之が工事は「**耕地整理法**」によること、した。

昭和八年十月十五日岩手県復興事務局及び支応耕地整理課の指示の下に「**耕地整理組合**」組織に着手し十二月五日設可の申請をおこなひ、同十三日之が認可を得て同十六日創立総会を開催して定欵を決定の上地主全部の賛同を得て成立した。

組合事業の主要なるものは、住宅地の区画、割当、耕地の土砂取除、道路の掘鑿切換等にして、工費三万二千円は、之を起債一万五千円、県補助金一万七千円による事とした。

（二）防浪堤築造計画

大字下小林より大字青砂里出羽神社山麓まで、見通し一直線に延長約一千米の当初の計画は、工費二十数万円を要する結果、不認可となり中止の止むなきに至った。

しかし村将来の発展上、計画を中止するは悔を百年の後に残すものあるを思ひ、計画を縮小して、大字小林突角部より、字乙部長内川橋迄とし、第一期工事分、延長五百米、高さ十五米は村費による事とし、宅地造成資金として、工費六万円を預金部より借入する事に決定した。

（三）長内川護岸計画

長内川は市街地北部を流るゝ小流なるも、市街地計画に至大の関係ある為め、工費六千八百円（八、五割県費補助）をもって切換及び護岸を行ふ事となった。

（四）田老川護岸計画

田老川は市街南部を田老湾に注ぐ河川にして、交通上重要なるものある為、工費四万五千円（八、五割県費補助）をもって之を切換え、防浪堤外側に沿って北流せしめ、長内川を合せて田老湾に注がしめる事とし、尚ほ川口より、四ツ嶋附近に「**繋船護岸**」をつくり荷役の便を図る事とした。

（五）防潮林養成計画

田老須賀、砂地約七町歩に黒松及び赤松を植栽する事となった。

二、生産施設援助による施設計画

（一）生産施設援助

生産施設援助費として、総額二万五千円を義捐金より得て、左記の如く交附し、之の施設を促しつゝある。

水産共同施設（漁業組合）	七、八〇〇円
養蚕共同施設（養蚕組合）	一、五八〇円
畜産共同施設（産牛改良組合）	五、九六〇円
林業共同施設（産業組合）	二、八〇〇円

副業共同施設（同　　）	四、二〇〇円
商工施設（同　　）	二、六六〇円

しかして各組合における復旧計画は次の如くである。

イ、漁業組合

漁船漁具造費として、岩手県殖産銀行より五万円を借入し商工業復旧資金（後述）より二万五千円を得て漁具を購入し、小漁船（サッパ）七百を建造、組合員全部に分与した。

尚ほ、現在計画に属するものは、共同販売所、共同加工場、大型漁船の建造及び、築磯復旧工事等である。

築磯工事は、大字摂待及び大字乙部宇青ノ瀧の両海岸に、工費約二、五三〇円をもって、投石による築磯をなすもので、水産共同施設援助費より工事費の半額を補助する筈である。

（本村における漁業組合は、従来三組合併立のため組合員の不利益少からず、之が合併の必要が叫ばれてゐたが、昭和八年七月十二日合併決議の上今年十月十九日認可せられた事は喜ばしい限りである）

ロ、農会

村当局の援助の下に、前述の如く

耕地被害復旧地		半額国庫補助
農具（現品）		八、三〇〇円
納屋建設費		五、二〇〇円
種子		
馬鈴薯		六四〇俵
蔬菜種		二石五斗
大豆		二五石六斗
雑穀種		一二石四斗
甘藷苗		二六、二四〇本

を支給配布し、極力耕地の復旧に努力すると共に、肥料共同購入、耕耘指導をなしつゝある。

ハ、産業組合

木炭倉庫建造	二、八〇〇円
桐苗圃設定	
副業施設	二、六〇〇円
（醤油醸造場の建造、ブラシ製造）	

ニ、産牛改良組合

牛種改良		
種牡牛	一頭	一、三〇〇円
種牝牛	九頭	三、一六〇円
飼料共同調整備		六〇〇円

ホ、養蚕組合

費用四、九六〇円（内県補助一、七六〇円）をもって蚕具、蚕種を分与し、桑園復旧費として苗木代を支給する等復旧を計画し、尚ほ総工費一、六五〇円（県費補助一、三〇〇円、蚕共同施設一、三五〇円）にて「**稚蚕共同飼育所**」を建造する事とした。

ヘ、養豚組合

総経費六六円をもって、種豚購入及び共同飼育所を建造する事とした。

ト、養鶏組合

総費三三〇円をもって共同育雛場を建造し、初生雛を共同飼育し組合員に配布する事となってゐる。

（二）商工業其の他への援助

県転貸の低利資金を借入し、左の如く無利子にて復興資金として転貸した。

商工業復旧資金として	四、五〇〇円
運送船建造資金として	三、五〇〇円
郵便局舎復旧資金として	一、五〇〇円

イ、運送船建造資金の運用

唯一の交通機関たる運送船流失の為め、支応援助の下に漁船を借用して、交通運輸に当らしめたるも種々の支障あるにより、資金を貸与

し、五月五日、六月十五日、九年一月五日各一艘を建造せしめて、宮古、田老間に就航せしむるを得た。

□、郵便局舎復旧資金の運用

津浪の為め機能を破壊されて、一時全く通信機関の途絶をみたが、三月四日民家の一部を仮局舎として事務を取扱ひしが、不便なりしため独立家屋を建設し是を仮局舎とし、六月四日移転をみるに至った尚目下復旧資金に依り本建築局舎設立計画中である。

三、各団体会社

（一）消防組

震災による部員欠員の補充をはかり、組付小頭に、鳥居（福）氏、一部長に鳥居（初）氏、五部長中島氏、六部長和井田氏以下それ〴〵全部の補充を得た。

尚ほ器械器具の復旧を復興委員会にはかり、左の如く決定をみた。

機械器具購入費　八、八九八円
三輪自動車ポンプ一台、新式乙号腕用ポンプ二台
其の他器具被服全部
貯水池設備費　二、〇〇〇円
火見　屯所　三ヶ所

（二）電灯会社

震災後直ちに、約二万円をもって復旧に努力し、四月半にして点灯するを得た。その後は市街工事の進行につれて順次に本工事をおこなふ筈である。

四、其の他

（一）備考倉庫の建設

将来の非常災害に備へて罹災救助に資すべく工費二千七百円を投じて之が建設をなし、食料品、衣類、日用品を常備することとなった。

（二）診療所の建設

非常災害に当り、差当り必要とする医療薬品を常備し併せて平時の医療所に当てる目的をもって、診療所を建築し、医薬品、其の他（軍用行季、薬剤行季、救急箱）を常備する計画にて、既に薬品の交附を得た。

（三）教員住宅の建設

教員の住宅難を救ふ目的の下に、預金部より低利資金千六百円を借入の上、二戸一棟を建築する筈である。

（四）住宅資金の運用

罹災者の住宅建築の資金割当八万五千円をもって、借入希望の二百五十戸に対し、最高一千二百円最低八百円の転貸をおこなひ、もって住宅を建築せしむることゝした。

（五）隔離病舎の建設

現在計画中なるも、財源難にて目下考慮中なるも幸ひにも、伝染病の発生をみず。

◇

上記略述せる如く、村民一致復旧復興に努力せる時、愛国婦人会岩手支部は本村に託児所を設け、手足まとひの就学前にある子供の保護を企画し、五月一日小学校に併設開所、現在入所総数二百余名を得て、復興工事に陰の援助を与へてくれた。

田老小学校学校日誌

一般記事

昭和八年三月三日　金曜日（晴）

午前二時四十分頃大地震あり、震動時間約五分。地震後凡そ三十分程経て津浪襲来、家屋十数戸を残し殆んど全滅す。

学校異常なく、避難罹災者負傷者を収容す。

全校児童生死不明、職員行方不明元田光雄訓導、死亡赤沼夏子教員、重傷吉田中訓導、他職員無事。

同　三月四日　土曜日（晴）

職員会、協議事項児童生死調査に関する件、校舎使用と取締（戸カ）に関する件。

午前十時より全職員にて生存及死亡児童の調査をなす、其の結果生存者五百三十名、死者百十名、不明八十名なる事を知るも正確なる数に非らず。

午後四時頃元田訓導の死体発見直ちに出生地花輪村に送る。

午後十時より男職員全部交替にて不寝番、校舎罹災者収容室火器取締り巡視の任に当る。不寝番は本日より罹災者全部校舎引き上げまで続行の事。

校舎に収容されし罹災者昨日より著しく数を増す。

同　三月五日　日曜日（雲）

職員会、協議事項生死児童調査の件。

午前十時より調査

午後五時罹災者収容室各代表を招集し、火器取扱ひ衛生等の諸注意をなす。

罹災者に充てる防寒具及び火鉢不足。

同　三月六日　月曜日（晴）

弔慰訪問者多数あり職員多忙を極む。

校舎出入の者土足のまゝなるが故に舎内著しく汚損す。

同　三月七日　火曜日（晴）

収容家族人員調査。

本日も弔慰訪問者多数あり。

同　三月八日　水曜日（晴）

午前九時、全校児童を招集し家族生死者調査。

同　三月九日　木曜日（晴）

勅使大金侍従閣下御来駕、罹災者負傷者に有難き御見舞の御言葉を賜ふ、罹災者一同聖恩に感泣す。

同　三月十日　金曜日（曇）

職員会、協議事項、児童招集の件

同　三月十一日　土曜日（曇）

午前九時児童招集。

本日寒さ甚だしく罹災者の風邪に罹る者多し、午後七時篠木青年団員に津浪遭難談をなす。

同　三月十二日　日曜日（晴）

職員各受持罹災児童宅訪問。

同　三月十三日　月曜日（曇）

前日に同じ。

同　三月十四日　火曜日（晴）

日増しに暖さ加り負傷者の数減ず。収容罹災者の多くはバラック建設の為め外にて働く。

同　三月十七日　金曜日（晴）

高等科児童を招集し、講堂の掃除をなさしむ。午後吉田訓導を学校救急室に収容す。

同　三月十八日　土曜日（晴）

午前八時半全校児童招集、家族生死調査をなす。

午前九時講堂にて全村罹災者に恩賜御下附金伝達式挙行。

同　三月十九日　日曜日（晴）

全村罹災者に種痘施行、収容罹災者バラックに移転する者あり

同　三月二十日　月曜日（晴）

宮古理髪組合員二十余名来校無料にて罹災者の散髪。吉田訓導宮古医院に入院す。

同　三月二十二日　水曜日（曇）

校舎の大洗ひ。収容罹災者バラックに移転す。

同　三月二十三日　木曜日（晴）

午前九時全校児童招集。職員会議。修業式卒業式に関する件

同　三月二十四日　金曜日（晴）

清延山念仏堂に於て海嘯横死者追悼供養会施行。

職員児童一同参列。

同　三月二十五日　土曜日（晴）

罹災者収容各室の消毒をなす。

同　三月二十六日　日曜日（曇）

同　全校児童の招集。職員室の消毒掃除。
　三月二十八日　火曜日　（吹雪）
　午前九時より修了式及卒業式挙行。
同　三月二十九日　水曜日　（晴）
　校務整理。
同　三月三十日　木曜日　（晴）
　校務整理及新学期準備。
同　四月一日　土曜日　（晴）
　入学式、始業式、罹災児童給食開始、慰問品配布
同　四月十二日　水曜日　（晴）
　学用品、教科書配布（岩手県教育会及び各府県団体より寄贈）
同　四月十四日　金曜日　（晴）
　種痘検診。
同　五月一日　月曜日　（晴）
　託児所設置。
同　五月十一日　水曜日　（曇）
　職員児童金光教慰霊祭に参列。
同　六月十八日　日曜日　（晴）
　石黒県知事殿外七名御来校校長室にて職員一同に御訓辞、尚校堂にて村長外村民一同に対し御訓辞。
同　六月二十日　月曜日　（晴）
　反物、洋服（岩手県教育会よりの被服費）学用品費罹災児童に配布。
同　七月二十五日
　岩手県教育会寄贈の夏季練習帳を罹災児童に配布。
同　九月五日　火曜日　（晴）
　田老村有志来校産業復興打合せ会。
　罹災児童へ学用品教科書配布（岩手県教育会及び各地府県団体其の他より寄贈）
同　十月二十日　金曜日　（雨）
　午後六時より罹災者慰問の為、簡易保険局主催にて活動写真開催。
同　十月二十四日　火曜日　（晴）
　洋服反物足袋学用品配布（岩手県教育会及び各府県より寄贈）
　雨合羽百岩手県教育会より寄贈。
同　十一月八日　水曜日　（晴）
　森下博氏より歯磨九百袋児童へ寄贈配布。
同　十一月九日　木曜日　（晴）
　震災誌委員会開催。
同　十一月十一日　土曜日　（曇）
　産業復興組合委員会。
同　十二月十一日　月曜日　（曇）
　復興委員会開催。
同　十二月二十日
　岩手県教育会より寄贈の冬季練習帳を罹災児童に配布す。

学校関係慰問者
昭和八年三月四日
　岩手県教育会森嘉兵衛氏。
　鍬ヶ崎校長高橋芳太郎氏外職員一同。
　鍬ヶ崎補習学校長代理舘洞福太郎氏外生徒一同。
　亀岳校長千葉萬之丞氏外職員一同。
同　三月五日
　宮古小学校長石川耕一氏外職員一同。
同　三月六日
　宮古水産学校長外四学年生々徒一同。
　崎山小学校長畠山松助氏外職員一同。
同　三月九日
　遠山県視学来校。
同　三月十日

　山崎視学官殿、下斗米県視学殿、宮古女学校長、宮古小学校長殿
同　六月十一日
　猫塚視学殿、黒金女師校長、宮古小学校長殿。
同　十月四日
　木村県視学殿。